

週刊 武四郎

第24号

2018年(平成30年)9月19日(水)
発行・松阪市

●毎月第三週は、
松浦武四郎のお友達に
についてご紹介します

監修・松浦武四郎記念館

周囲の人々……自伝から



『新版 松浦武四郎自伝』という記録を丹念に読んでいくと、武四郎さんが思いもかけない人と出会っていることにびっくりします。たとえば、安政二(一八五五)年の一月十二日。「収造同道、一勇斎国芳方へ蘭画を見物に行、そのうち古銭譜(凡そ目方五貫目も有る也)実に見る驚かせり」

なんと、浮世絵師の国芳の家を訪ねていつているのです。国芳といえは、武者絵や猫の浮世絵で有名な絵師……実は私、この国芳の小説を五冊も書いてるので、なんだか妙な気分。……二人は知り合いだったのか！

国芳は忠臣蔵の討入り図を西洋風な技法で描いたことで知られていますが、実は洋書の挿絵をそっくり真似して描いたこ

とが最近の研究でわかっています。確かに国芳は、葛籠にいっぱい蘭画を集めていて自慢していたといえますから、武四郎さんが見学に行ったとしてもおかしくはないのですが……さらには古銭譜も見せびらかしていたとは！

〈収造同道〉とありますが……案内した収造さんって、誰？ってずっと気になっていたのです。実はその三日ほど前に武四郎さんは、越後の人〈新発田収

蔵〉と初めて会っています。それって柴田是真のことでは？！

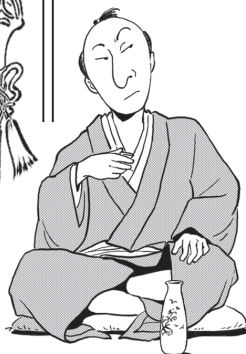
(是真は本名順蔵といいました。越後の人で、しかも国芳の師匠なのです。おそらく順蔵を収造と聞き間違えたのでしょう)。

柴田是真といえは、七月二十五日号でもご紹介したあの是真ですよ。奇を描いたら天下一品の江戸っ子国芳と、偏屈だけど絵師として漆芸家として名を轟かせた是真……そして若き日の武四郎。三人はいったいどんな話

に花を咲かせたのでしょうか。その他にも自伝を読んでいると、桂小五郎がジョン万次郎を連れてきたり、日本近代郵便制度の父前島密と会ったり、文久三(一八六三)年の七月には、のちに池田屋で殺される龍馬の盟友北添伝磨がやってきたかと思うと、翌月には龍馬を暗殺したといわれている佐々木只三郎が来たり……武四郎さんは様々な人々の間をヒラリヒラリと駆け抜けてゆくような印象を受けます。

松浦武四郎 (1818～1888)

三重県松阪市出身。幕末から明治にかけての探検家、著述家、蒐集家。蝦夷地(今の北海道)を6度にわたり探査し、アイヌの人々と交流を深め、蝦夷地の詳細な記録や地図を作成した。維新後、蝦夷地に代わる新たな名称として〈北海道)のもととなる〈北加伊道)を含む6案を政府に提案したことから〈北海道の名付け親)と称される。



文・河治和香 装画・りんたろう 編集・細山田正人 デザイン・DOMDOM

●松浦武四郎を主人公とした小説『がいなもん 松浦武四郎一代』(河治和香著)が、小学館より好評発売中！

